

中国の海洋進出と日米の対応 (その1)

2012.3 岡本 洋

—東シナ海を中心とした戦略的緊張と対応—

1. 緊張と不安定を増す東アジアの海—南シナ海、東シナ海、黄海

1.1)民間漁船等の悪質な侵犯——2009年3月、南シナ海で起こった「米・海軍音響調査船に対する中国船の集団妨害行為」(第3、4図参照)に加えて、我々に強い衝撃を与えた2010年9月の「尖閣諸島沖の中国漁船の我が国巡視船への衝突事件」(第1図参照)は、中国のこの海域に対する強硬な態度を強く印象づけた。2つのケースは少なくとも正規の軍艦ではないのだが、尖閣の場合の衝突直前の下の第1図を見る限り、これは明らかに意図的な衝突である。我が国領海内で不法操業中のこの中国漁船(閩晋漁ミンシンリョウ 5179)は、

対処に向かったわが巡視船に対して常識を脱した傲慢な操船で向かってきた。右の第1図で見る中国漁船の航跡は日本の巡視船を追ってハードの右旋回の後、更に巡視船を追って船尾につく為に、更に左旋回しようとする様子はその航跡から推察できる。巡視船の船尾を補足、意識的に体当たりを狙っている様にみられる。巡視船もこの画面(NHK TV 画

尖閣諸島沖 中国漁船の衝突直前の船位関係



この時点で、海保巡視船は左舷回頭で回避、漁船は左回頭開始を思わせる航跡

第1図 尖閣諸島事件の衝突直前——2010.9.07

像)では左旋回でそれを避けようとしているが、この直後に船尾に衝突されている。操船の観点からすると、このような相対船位関係にならないように、事前に然るべく対処できたのではと考えられるが、何ぶん前後の事情が不明なのでよくわからない。今後のために、ハード、ソフト面の教訓をくみ取り対処検討されているであろう。この海域には中国漁船が多く群がっている様だが、黄海の場合ほど過激先鋭化したものではないのは幸いである。この不法操業に関連して、中国漁業監視船のわが領海、EEZへの接近事案が右図のように多く報告されている<sup>1)</sup>。

期 間	中国漁業監視船
平成22年9月10日～13日	漁政202
9月13日・14日	漁政201,202
9月14日～17日	漁政201,204
9月24日～10月6日	漁政201,203
10月24日・25日	漁政118,202
11月20日・21日	漁政201,310
11月28日・29日	漁政201,310
平成23年1月27日	漁政201
3月5日	漁政202
3月9日	漁政202
3月10日～12日	漁政202

2図 中国漁業監視船の尖閣諸島  
周辺海域への接近事案 →  
(平成22年9月～平成23年3月) <sup>1)</sup>

計 11件、57日隻

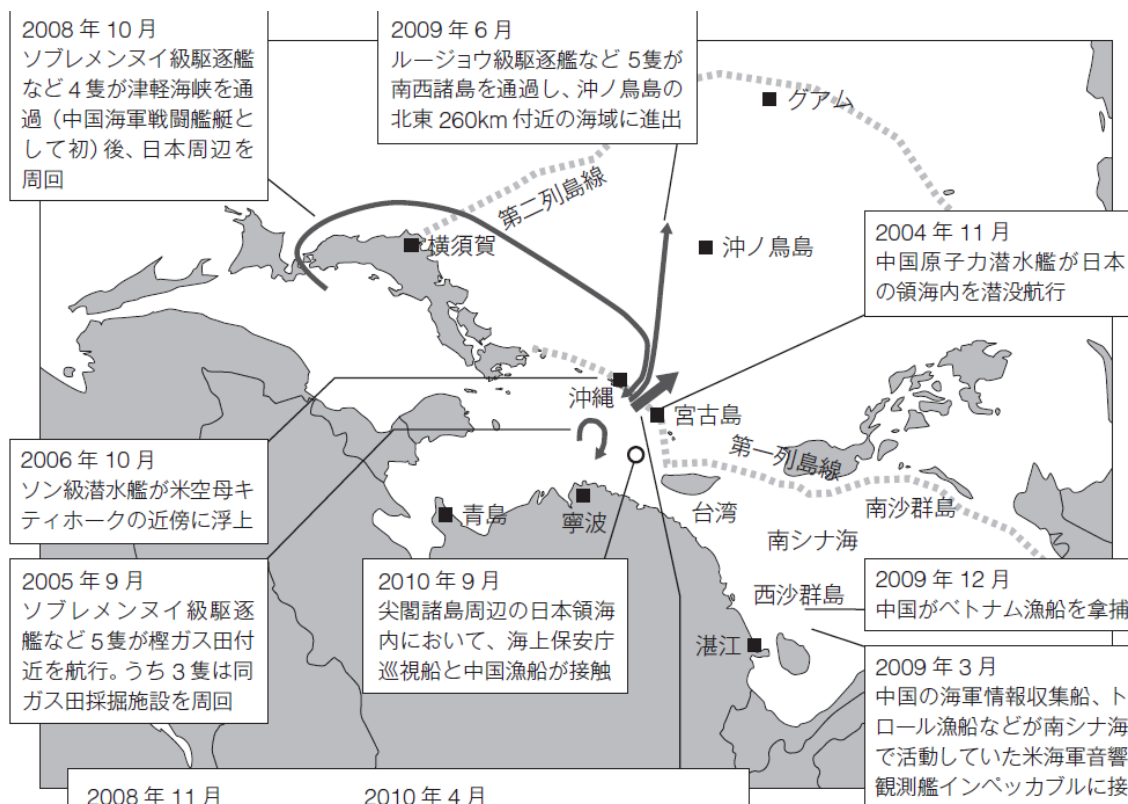
更に今年(2012年)になって、3月16、17日には、満載排水量約4,000ton、へり搭載の中国大型監視船「海監50」がこの海域に出動、へりと共に巡航した(2012.03.18朝日)。

一方、韓国・黄海では中国漁船の集団による違法操業が続いており、遂に昨年 2011年12月12日には、韓国のEEZ内で韓国海洋警察庁の特集部隊隊員2人が中国船員にガラス片で切り付けられ、内一人は死亡、一人は腹部に負傷、という過激な事件が起きている。このように、中国をめぐる海は今、南シナ海から、東シナ海、黄海まで危険と不安定に満ちた海と化していると言わざるを得ない。

——これらは少なくとも非軍事・民間の事件ではあるが、中国の国家体制からすると、政治的な背景を感じずにはいられない。ならば、一方国の政策と共にある中国軍艦の動きはどうか。実はここでも活発化がエスカレートしている。以下はその概要である。

**1.2)中国艦艇の動き**——第3、4図は防衛省資料<sup>2)</sup>に基づく、近年の中国艦艇のこの海域周辺における活動を示したものである。

**第3図 周辺海域における中国の主な活動**



防衛研究所資料 1)より

**第4図 周辺海域における中国の主な活動——第3図を表にしたもの**

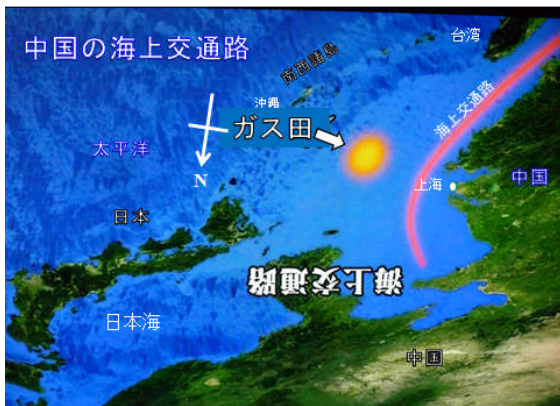
年月	中国艦艇・隻数など	行動場所等
2004.11	中国原子力潜水艦	宮古島~水道、石垣島~多良間島を潜没航行。
2005.9	駆逐艦等 5隻	ガス田 付近、うち3隻はガス田施設周回。
2006.10	ソン級潜水艦	米空母キティホークの近傍に浮上
2008.10	駆逐艦など4隻	津軽海峡通過(中国戦闘艦艇として初)、日本周回
2008.11	駆逐艦 4隻	宮古島~水道より太平洋へ
2009.3	海軍情報収集船、 トロール船	南シナ海で活動していた米海軍音響観測船 インバッカブルに接近、一部が妨害行為。

2009.6	駆逐艦など 5隻	南西諸島を通過、沖の鳥島の北東260km付近に進出
2009.12	中国が	ベトナム漁船を拿捕
2010.3	駆逐艦など 6隻	宮古水道より太平洋へ
2010.4	駆逐艦など10隻	宮古水道より太平洋へ、へりが海自護衛艦接近飛行
2010.7	駆逐艦など2隻	宮古水道より太平洋へ
2010.9	中国漁船	尖閣諸島周辺の日本領海内において、海上保安庁巡視船と接触(衝突)

2004~2010年 計 12 件 防衛省資料よりの編集 2012.3 岡本 洋

第5その他を見ると、中国は第一列島線によって封じ込められた形になっているのがわかる。これを通過できるのは、①大隅海峡、②奄美大島/宝島、③沖縄本島/宮古島、④與那国島/台湾、⑤台湾海峡だが、実績では③沖縄本島/宮古島水道が太平洋への主要な出口となっているのが良く理解できる。

↓図5 中国側より見たの海上交通路 北が下

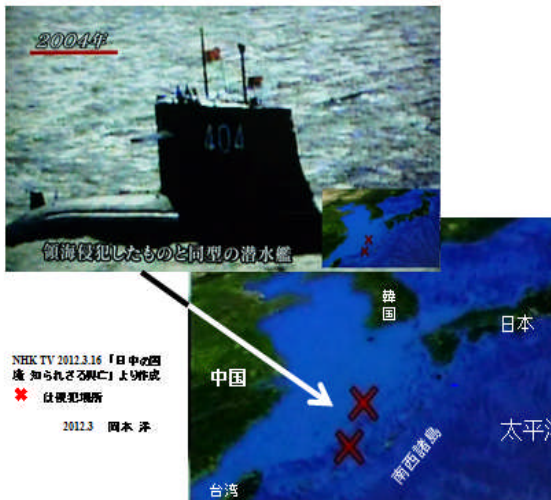


↓ 図6 中国艦艇の侵犯関係位置



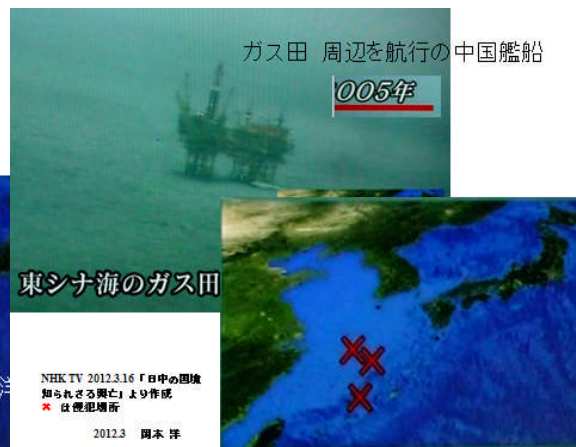
↓図7 中国潜水艦の領海侵犯関係図

2004年



↓図8 ガス田周辺を航行する中国艦艇

2005年



以上のような海上、水面下に加えて、更に航空機による周辺海域、更に太平洋への進出も活発なようである。このような状況の背景について考えてみる。

## 2. 協調から強硬への人民解放軍の戦略転換—2010年

「国力を増大させ、自信を強めた中国が、米国や周辺諸国との摩擦を省みず、自らの国益を追求するために強硬な姿勢をとり始めた転換点の一つとして、2010年は記憶されるのかもしれない」——最近の中国艦艇活動を含めた1.1)で見えてきた様な活発な周辺活動の分析から、防衛研究所の報告<sup>2)</sup>はこのように「2010年は中国が協調から強硬に転換した年」と見做せるとしている。従来、人民解放軍は、日中問題に関して外交部や、人民日報などのメディアの過激な反応にたいして、やや抑制されて対応をしていたが、ここにきて明らかに方針を強硬路線に転換した、としている。

所が、実はこれには背景があり、これより先に中国胡錦濤政権トップにおいて、大きな外交政策の転換があつた事を清水美和氏（東京新聞・中日新聞論説主幹）は明らかにしている。それは「2009年7月の第11回駐外使節会議」だと言う<sup>3)</sup>。

## 3. 中国外交の積極強硬政策への転換——2009年7月、胡錦濤主席の重要演説——「韜光養晦、有所作為」から「堅持韜光養晦、積極有所作為」へ

それは、「世界から大使を集め開かれた第11回駐外使節会議だ。5年に1度、開かれる会議で胡錦濤国家主席（党総書記）は重要演説を行い、新たな外交路線を示した。いまだに全文が公表されていないが、その後の公式、非公式の情報から明らかになったのは次のような点である。

鄧小平が示した「韜光養晦（とうこうようかい）、有所作為」（能力を隠して力を蓄え少しばかりのことをする）という抑制的な外交方針を「堅持韜光養晦、積極有所作為」に修正した。

能力を隠し、力を蓄えることを堅持するが、より積極的に外交を展開するという意味だ。それに対し、胡錦濤は「平和的發展」を掲げながらも、外交の最優先課題を「国家の主権と安全、発展の利益の擁護」と言い切り、鄧の「経済建設」を最優先課題としていた路線と決別した<sup>3)</sup>——というものである。防衛省の分析と符号する——更に、

「中国国家海洋局の『2010 中国国家海洋發展報告』は、政府文書で初めて09年に空母建造の決定が行われたと明記し「本格的に海洋強国の建設に向け乗り出した」とその意義を強調している。この時期に空母建設へのゴーサインが出たのは間違いない。

## 4. 中国の航空母艦建造と列島第1、第2列島線

4.1)空母1番艦「ワリャーグ」の就航間近(第9図)——中国の航空母艦建造着手は、海洋進出加速の一つの大きな核となるものである。問題の中国空母1番艦は、大連造船所で旧ロシアの「ワリャーグ Varyag」を改造してすすめられている。今年2012年3月8日午前、海軍副司令官の徐洪猛氏は、「空母の試験航行は今のところ非常に順調にいつている。戦闘機の試験も計画中で、空母は年内に就役予定だ」と述べている（チャイナネット2012年3月9日）。



資料写真:三回目の試験航行を終える中国の空母

第9図  
中国の空母  
1番艦  
「ワリャーグ」

Δ=58,900t,  
LoaxB=305 x 35.5 m,  
80,000 Hp,  
Turbine x 4,  
V=29 kt  
(露艦の資料より)

急拡大する軍備として世界より注目されている中で、このロシアより購入後改装している第1番艦の実質就役が年内に可能か否かはべつとしても、いずれ就航するが、続いて後続の空母も建造の予定にのっている。中国人民解放軍の幹部は「空母の保有は中国海軍の宿願である(朱成虎・陸軍少将)」と発言<sup>4)</sup>しているのは、かつて1996年の台湾海峡事件において米空母の出動になすすべもなかった中国の無念さを象徴した関係者の本音であろう。

4. 2) 空母建造と制海権確保 ——対米国防戦略として1997年に策定された「海軍発展戦略」は、次の通り。

第10図 第1、第2列島線——cf. 第3図、8)、9)

第1列島線	2000~2015年	内側の南シナ海、東シナ海、日本海の制海権確保
第2列島線	2010~2020年	内側への米海軍、空軍の侵入阻止。通常型空母2隻建造。
	~2040年	米海軍による太平洋インド洋の覇権阻止、原子力空母2隻の建造計画開始、米軍との対等な海軍建設

空母に関する中国の取り組みは古く、1985年オーストラリア海軍の退役空母メルボルン(英空母マジェスティク、Δ=20,000ton)をスクラップとして購入。9年かけて調査の上解体、蒸気カタパルトは保管されている。以後1990年にはロシア、フランスと空母技術資料獲得に努めてきた。「ワリャーグ」は2002年大連着後2005年2月の再生工事開始まで徹底的な調査が続けられた。外部専門家によると「ワリャーグ」の評価は低く、実戦配備ではなく教育訓練用との論評が多い。空母がその真価を發揮するためには膨大な関連のハード・ソフトの集積が必要である。「支援のための潜水艦と護衛艦部隊、哨戒・援護航空機部隊、イージス艦、艦上攻撃航空機群、運行・作戦情報組織部隊と人材養成、等」など。米国はこれ等の膨大な投資と実戦経験の積み重ねの上に現在の空母プレゼンスを築いている訳で、これらを考えると、中国部内にも対米戦略としての対抗勢力となり得ずむしろ、今後はミサイル、潜水艦勢力の整備が優れているとするとの異論も多いらしい。「ワリャーグ」とは別に、上記の空母建造計画は、085型通常動力、Δ=48,000ton型、089型大型原子力空母Δ=93,000ton型(上海江南造船所)と報じられる。

米空母と対比すると、現時点では圧倒的で問題外の感がするが、ちなみに、

現役米空母群——原子力空母 ニミッツ級 計10隻のうち、西太平洋・インド洋担当の



第7艦隊には、横須賀を母港とする「原子力空母ジョージ・ワシントン」が配備されている。

←第11図 米原子力空母ジョージ・ワシントン J.W (横須賀港が事実上が母港)

第12図 中米空母 概略仕様比較 + 海自の「ひゅうが」、旧海軍「飛龍」

国	艦名	Δ ton	Loa	Bm	主機Hp	主機	速力kt	就役年
中	リャグ	58,900	305	35.5	8万	T x 4	29	2012?
中	085型	60,000	300	70		通常型		計画2隻(2017~8年~?)
中	089型	93,000				原子力		計画2020年??
米	J.W	104,178	333	76.8	26万	原子力	>30	済、横須賀
日	ひゅうが	13,950	197	33	10万	GTx4	30	済、ヘリ空母DDH
日	同改型	19,500	248			「ひゅうが」後続艦		2014年予定
日	飛龍	17,300	227	22.3	15.3		34.5	1939年、帝国海軍

「ひゅうが」ヘリ搭載容量 11機、定数=哨戒ヘリ 3機(同時発着艦可)。

4.3)海自の「ひゅうが」——「ひゅうが」型護衛艦は専守防衛の設計思想に基づく艦種であり、図中の他の攻撃型空母とは異質だが、2009年に就役した新鋭の大型艦。

↓第13図 海上自衛隊「ひゅうが」ヘリコプター搭載護衛艦 DDH



2009年に就役した本艦は、海自艦隊の中でΔ ton、Loa共に最大規模の艦型で現在2隻就航。続いてサイズ up した後続改型(Δ=19500ton、Loa=248m) 2隻が建造中で平成 26年より相次いで就役予定。第9図の比較では見劣りがするけれども、この仕様は旧帝国海軍の正規空母「飛龍」のLoa=227.35mを上回る点は注目されてよい。現在国際的に価値が見直されている

軽空母と同等となろう。「ひゅうが」には、護衛艦としてはじめて、護衛隊群司令部を十分に収容できる規模の司令部施設(旗艦用司令部作戦室・FIC)を設置している等、

進んだ IT 武装が施されている。空母艦隊の核心的プレゼンスである攻撃機の搭載は勿論ないが、然し有事を考慮して、当然それに耐えうる設計的考慮(垂直離着機用)があつてしかるべきだと思われるが、部外者にはわからない。米第7艦隊との連携においてかなりの高い機能発揮が期待できる。

## 以下次号

### 次号予定

日本の対応—日中軍関係者の意思疎通・交流、  
米国の対応—米軍の再編、A2/AD、AirSea Battle  
考察—米中軍備費比較、中国ミサイルの急進展、空母キラー、  
瓦解戦、中国戦略と政策決定、第3列島線と日本のシーレーン  
今後の展開、提言 など

### 参考文献

1. 「海上保安レポート2011」新たな海上立国に向かって 海上保安庁 (平成23. 3)  
<http://www.kaiho.mlit.go.jp/info/books/report2011/index.html>
2. 「東アジアの戦略概観 2011」防衛省 pdf 版 防衛省防衛研究所 平成23年(2011)3月
3. 「中国外交の09年転換とその背景」 清水美和 (東京新聞・中日新聞論説主幹)  
「中国・インドの台頭と東アジアの変容」第5 回研究会  
(2011 年9 月8 日開催にて、 IDE JETRO <http://www.ide.go.jp>)
4. 「国境の海—日中の知られざる攻防」NHKスペシャル 平成23年(2012)10月16日  
—鄧小平の呼びかけで、1977年の第1回から始まった日中軍事専門家の交流会議のやり取りを、生々しく伝える内容。中国側は現役人民解放軍の幹部。現在まで35回も毎年開催が続く、それぞれ10人弱出席。日本側は自衛隊退役のトップ 幹部、初代会長は三岡健次郎元陸相とする中国政経懇談会、現在の会長は森勉元陸幕長。
5. 「日本周辺の軍事兵器」中国航空母艦計画
6. 「中国の新しい対外政策」—誰がどのように決定しているのか (岩波現代文庫)  
リンダ・ヤーコブソン、ディーン・ノックス、辻 康吾 (文庫 - 2011/3/17)
7. 「アジアの空軍軍拡競争を誘発する中国」—「機は熟すか」第2回 東 義孝  
防衛研究所 NIDSコメンタリー-第17号2011. 1. 26
8. 「EEZ と 海洋覇権」 岡本 洋 MATRIX NO.72 May.2011
9. 「沖縄の海」自然環境から潜水艦戦まで 岡本 洋 2010. 8 船舶海洋工学会  
「海友フォーラム」<http://www.jasnaoe.or.jp/k-senior/groups/kaiyuu/index.html>

以上